豆本尼箱

堀田正良之藏書

堀田持書

雪晨詩集巻之二

夢は花候よりも雪少敷歟　釈是使

雪と散る詩よりなほく碍の面

散る雪は木の葉ふるめん塚の雪

種は春初めて白妙乃詩歟

六月の雪色もまぬ碍見

幾年と絵ふる雪の詩の郭

花の雪一雪に詩ハみれる

夢城山下連

八十六公翁

梅初

杜雪

英戸

草浩

湖小

賤鳥

四季混雜

引ぬれや明石の浦　梅羽
反古ぬれハ作るれぬや出用于　〃
ぬるしてやハ梅の白つゆ　〃
早蕨り望かくむけて山路水　梅川
子ひとり被れ沙ハ面黄ひ　柳奇
孔雀子ひとり小春始　英戸
夕ぐやぬるまぬ掃部　〃
山吹や閑下ハ小れ吉　〃

さ乃山ハ道おほ人り初さら　鳥曉
山ハ秋や紫大きく紅多雲　有塚
山の端の月ハ遠ひ光　是使
風源ふまれ紫の言ふ小夜時雨　〃
武蔵野や月を遠ひ雲ハ海　眠花
七夕の八隣の人をおぼろ月　沢水
鶏雪や山ハ隠れて堂一ツ　杜雪
冷しさや用ハ川と行戻り　〃
山ハや垣り樵の遠かる　〃

日くに蒔て畠より利
播ろみも稲ぬきまひや牡丹畑　少年　柳童
月波も清し清し青々し海　　扇笛
沼うつも来てあをぬ初櫂　盲人　語夕
春雨や赤ふとりの我思ひ　　渤小
出ろしや蔵り掛ぬ蛇乃衣
やり稲苗かつ碎よう
たくと仲あうの夏の雪　七キ　麦丘
潮音やきぬ波ぬ障ぬう　　虎山

瓦山や雪冠とふ月　桔青
体ふと杉ぬ雨ハ鶯ぬ　草源
源しや尾ぬ月ハ孫ぬ
雪ぬ雪や雪の居聲ぬ下結の音

○

提て来るうに咲ぬ　杜若　上田　西石
ぬ地山河ぬ海ぬ雲ぬ
後ぬ雲ぬ富士の日光ぬ　雲常
郭ぬ結ん来かはぬ

[illegible]の秋を[illegible]のうちひ墨の淡さうを記
とゝて[illegible]作り絵[illegible]

[illegible]山や月子曲川[illegible]潭の雪　上田　左十
山[illegible]の廉よりし[illegible]し[illegible]
[illegible]の月[illegible]雲[illegible]　如毛
[illegible]一[illegible]の扉より[illegible]の[illegible]
[illegible]山の[illegible]なり[illegible]月　本布
[illegible]のやもし[illegible]
[illegible]蕎麦や[illegible]宿乃[illegible]　新町　寄行

七[illegible]や[illegible]の[illegible]　スハ　指曙
[illegible]川や[illegible]橋[illegible]夕[illegible]
[illegible]旬[illegible]や[illegible]　田沢足　茶ト
[illegible]の[illegible]　南仁　壮養
[illegible]流[illegible]　鉄戸　冠夕
[illegible]　田沢　止省
[illegible]　上田　麦秀
[illegible]

蓋ふ書斎や軒の風鐸　秀秀

月人のすみ行く月夜哉、

○

飛鳥より引橋の こゆる敷うち　岩雄尺　秋水

尺し雲ハ雲を村雨の　河西　岩光寺　稲れ

習ひ水ハ雲へ　吉田尺　雨柳

木の陰の草ハ細し　岩春寺　周賀

山ゆや蛙ふの　南條尺　可三

ゑをし東て風ハ尺　可三

七夕や御あれよ雲と紙の舟　仙山　白魚

橋枕よ岩の　さく　川

おもむろよ野面よ梅の　坂本宮尾　有樽

逆よ春や波うめも　麻績　多喜

肘堤乃塩　月　スワ　文浦

よく尺ハ眠るて　細代寺　蓼坊

岩ゑ海士　敷

晴ひる部や　そ　笑の　お

敬寺　花よと海る小萩　ゑ

風た障るより字見て来る也宿　素栞

東風に吹れて道更にけり　一竹

およそは雨修ふ殿のをや色　、

送り火のかけふ射する野寺かな　、

田鶴群て吹かれ古江に窓し　、

衛夜の影はやがて梅の花　文眠

向茶子や秋風呂立る庭の庭　、

落るのみにふかるも時は　、

二ツ三ツに晴て消る河原かな　、

秋風の河原に近て秋時雨　女　糸菊

紫根折て行人や秋の夕れし　女　蘭夕

墨染し見れ見や村尾花　文哺

浮と飛んで汐に波立川尾花かな　四ツ屋　蝦雯

郭公泣て藤の影かかへり　スハ　自徒

ちり秋やまたさめぬ石の札　、

赤く晴てか夜尺人長く楫かな　、

桜てやらもお日路の古江かな　、

うかれしてて住き居打十日餅　佐久郡　玉芝

不の絹く笠紫の羅や見て行 小市施 忠江

色よあめ秋の山の錦や遠樹梢、 文地

紫ふも花乃色よ折りかよけるさ、 石弓

云と紫打ち仏のまちや紅うるみ、 久富

春之部

上野

菜の花や海の面の春の雲 下道寺 海舟

日の出中や磯の蒸 松堂

面晴や春嵐和ら赤樫、 倚流

大蘇や雪の岩根の清水 女 春作

沙弥や小童和らぎて 女 花猛

巌掾や日ゝ赤うなる 女 繁英

きりゝの海や地の春永 知東

大樗や折ゝ和らぎ海作 蓮花 氣黛

道祖神や陽炎の古屋 イセサキ 紙帖

用ゝ行ぬ牛の沙弥や焼野赤 南牧 一柳

受深て其処ぬ色亜さく、 女 其水

さ面ゝの雪嶺の雲の春水 砥沢 蓼水

夏風や蹄の音の過ぎて　ト仙田　奥渕

海濤や磯に消て夕かすみ　宮崎　朔宇

面白の月に対する星もおかるかな　一宮　吟曉

蓮の葉やむし白玉の露の秋　秋蘭

警蕉人てらす月かな　大久保　把菓

入山や磯に流れ夕たなびく　小野子　三巴

荒波を越て来るおうらや男ぶり　きよ安

白くと曲折し梅や畑の角　楚岸

夏蘭の焼砂起て新末かな　楚蒙　馬朴

花盛繁昌の寺乃男かな　高平　羅光

竹山を推て来る春雲　素蘭

竹沢の墨塗乃雷　南来

ちるを見ハ歳しまく仏ちるよう　沼田奈良　雲子

敬一しう影形なるかな　五疎

面白をかをうの小夏の新緑かな　上植木　竹葉

清し咲や谷ぬけ小川の水乃響　山魯

夏柳や往来の新日の移り　細石

夕乃伊根ゑ竹ゑ夏日うゑ　廣水

初蕨　素外
福乃数八竹の　上野木　義石
石桃の葉散て池の水　環　柳眠
若竹や堤の日のおもて、　専車
まつ松の地や磯野の土竜草、　榊石
雨ふる柳や胡蝶飛かう日れ移り、　文聽
柳ふや柳一本残れる　大原　青蒲
見渡せば桃や柳や帆かけ舟、　狐角
山吹の葉の新よ干ふ浦さうな、　白斗
行春や丈四五寸乃書白の　大間々　文江

山吹やいろ乱れかな屋敷　柳　友之
芳しき池の小浦乃菫の船、　松羅
茶毒や寒さたうの縣　茨木　茂白
夜雨や揚ふれ音陳みも　茨宜　茶宜
夏ふふ系拍ふ不ふり凡巾　大間々　女　妻朝
菓子の蕨凡芳春の親燕、　奥子
赤土乃こ乃舞屋菖蒲　千ヤキ　蹄香
搗竹や乳母ふ拍ふる小振袖　吉井　具石
初ふ風ふ末の芽を一日ふ小　卜全

夏之部

鶯戸出や雨の田居より明る弱（吉井）　其蜂

面白や日やかゝる柳さゝ〻　白　栢葉

梔子の垣もむらや比丘尼寺　枝邦

すゝしさや細密体小柳流（下仁田）　奥渕

森〻と人〻も起るは蒸（蒸示）　一釣

外の山ハ雲も見る富士清し　何詣

分け入ハ青ふの中の蓮如　〻

麦秋や春の無き紀白　〻　我白

玄川や男出る乃女乃童（茅師）　其雲

乳母ゝ出て長く腰ら赤や鄙（ほゝゝぎす）な　九女

鶯こ光し富士乃禁（ふとゝぎす）や高ゝ之　〻女

雨晴や新緑の子、盲人　〻音

鶯鳴や人れ〻ゝ〻ゝ〻ゝ　蛙水

川岸ハ七ゝ〻紀害や移り〻ゝ　松羅

深の動や咲し斤多ハ移小舟　米角

打もよし父の森見よ蜀　魂　呑詩

ちゝ〻ゝ〻ゝ蒔ゝ雨ゝ夕ア仰（大間ゝ）　呉山

苺白小澤の深草や冥古多　大岡と　以峰

麦秋や孫と拾ふ一かせき　文京　雪戸

入梅晴や高下駄よごす　沼田　利川

月と蓮花の蕾小さく　白臺

若葉や蜩乃山かげ夕日新　言平　眠江

川稽や高き鳶のさへぬる　素蘭

故へ乃堤孔添やかきつばた　花多

いつ雲孔鶯ひとし山そ三月雨　文ノリ　麦雨

石稽の赤き蕊荒り牡若　言井　燕花

涼山色や夕枯松よ鶯おこせ　大笹　有来

夕立や埃逃ちる面孔御　春社　宇雪

涼しさや岸よさへめく波の音　麦兎

涼しきや淋しと角て人の夢　二地

芝地色や夜の赤の赤の赤や　堤　示鏡

夜孔月蛍高く私さう乃蟬　柿眠

古沼や岩清水小若孔苔　谷石

干岡や羽蟻乃ひ乃の後　雪車

星乃夕川鳴く人孔夢　茂呂　佳水

五月雨や絆断れし庭の竹の丈　芦明

何ゆゑなく行く川や蛍　秋水　山名

布さらす川の淀みや夏の暮、　如竹

枯色や磯山畑乃麦の焼　シハ秋　南擔

夕れむのてりや夏の月涼き　人ろく　女紀

植てうゝ江八幡乃田唄う邪　陸奥尺　風竹

五月雨や弟のたゞ活さうな　岩居　侍流

汁多く飛ぶよりなく一羽う邪、　孟川

おそふ海くよりの鮎川の岩波、　永蝶

秋之部

明るゝ春を見上る麻北瀦の邪　南牧　一竹

だ六畳よりあるもかとるゝ江、　女多多

秋ち川新巷よ捨ゝ北一案山か　孤沢　夢水

人望八なるかゝくれて玄郷うれ　宮雪　女　柳台

清草ゝ北まれ見しゝ雲北秋、　羽宇

萩の花露を櫛つて長なりぬ　二ノ宮　丹胡

影沢の下ゝ水もきてゝる小庵ゝ、　羽黄

下ゝ田稲新て手を折れゝ、　芳夕

さら紙破て只柄杪井の花清し　吉井　具蝶

白櫻の露にさそふ花の月、　卜全

名月やいさよひなく日のおもて、　女　園李

面白や聴鳴く野路乃一里塚、　為梁

文月に鐘ハ聞へて淋しかりし、　石

是に似し日和定て菜乃はな　為邑　久宜

あり悲や乱るる萩と牛の筆　女　紫英

まる月の夜の窓に落し三日の宵、　祖秀

蝶風や百合の實背川四月越、　盃川

秋深し芥が中や藪の花　河丹

高砂の浦より丸亀へ渡侍る沖にて
名月の夜に舟を浮かべりして

心細し藻に住虫乃夜たて鳴く　芭派　葉園

稲妻や入江に小舟をよりも　今

桐一葉落て立けり雀かな　五明

面影を鷲る白也蕎麦の花　蕉居　倭明

萩の末月も萩より花ルこの姫　蕉派　五雲

此秋は伸て行かり雁の竿　イセサキ　花凹

夕照や田中の森に渡り鳥　青蒲

秋雨や壁に象の鼻の形　細石
高く見し花芋の丸れや海の面　竹葉
行く春や鳥啼き魚の目は泪　廣水
雲捨て山猫うるる乃峠哉　鶴石
波乗るて羽織かしる浪芋　芋瀬
夜や閑く月は小舟浮き人　蘭舎
月影や庭よりうつて秋乃音　銅水
麻畑や星ハ川ゟ出る夕　麦兎
一面ゟ引く萩乃盛哉、　二鳩

一日は明ゟ乃沼や塔の沢　七星
新蕨は又乃ゟる時ハ凋ゟ　燕飛
夜やゟく郭公ゟ出の鳴音哉　左南
麻畑て三の行ゟ月乃ゟ　麦雨
拾一ゟ人ゟの天の川、　有来
鳴ゟ引　老は乃雁ゟ利　雨朴
月白し小面ゟ雁鳴く事哉　三巴
黍ゟ乃風荒く波は月ゟ　羅光
山ゟや青の中ゟ水の音、　眠江

名月や海もやはらぎ赤良　素考
ふんつりと濁り酒哉黄ばむ　五凉
麻畑や蕎の入日赤き　泥田　利川
月雫は蟋蟀乃こまる面の雪　大系　弥角
州つゝや苗代系れ女帝花、　雪戸
多賀の濡羽ゝ月の光り、　尺　梵雪
刈取る水田ゝ月乃涼め和　如柳　丁古
武蔵鄙やさ佐る蕎麦の繊　蕎系　指言
稲毒や鷺なる面白し、　文刻

稲ゝに降り来る雪ゝつゝ、　雅冨
岩ゝ雪や見ゆ紅葉ゝて沈、　響一
かく枯し桐ゝ花乃茶の香和　白斗
うんうゝ墨ゝ和や納ゝ汁　梵雪
翁ゝ雪ゝ隙喰て居ゝ家ゝ汁　宇雪
風ゝ吉帆引舟の沈ゝ多　文聴
三ゝ乃ゝ松ゝ枯野の河ゝ水　抑石
一河白時月詠や月の暈　示鏡
吹ゝしてい又ちゝ宵乃藤系汁　谷石

荒風や蓮の茎折れおれし面　芦堂

山路ハ落葉のとまる、　少年芦戎

風やあるる小埋む霞れ雪　如井

雪れ白みなれる白く晴るる　南樓

霧雲の底中おしや嵐色　栗雲

麦芽や時雨よ寒川也明く　松堂

蕎積し本の葉よ蟲の鏡かな　女　蕎竹

丸見せる雪よ鶏明く鶏氣かな　舟蝶

天道ん海示る雪れ如　女　花湖

蕎の穂や遮るかから雪虫の影　文江

雪蕎麦鄙の中乃小松哉、　雅留

一つ哉なれる蛙し秋の雲、　玉十

寺門や船乃中より和の音　以鳴

谷屋よ横火の天、て蕨の雲、　為一

垣ゑ世界黄葉一色彩ふ、　呉山

霊棚や月さし風の事ところ　越示尺　風竹

冬之部

芦も青く万葉集にも所出は　言峰　雨竹

秋盆に初ものこぼれけふの雪　（松井田）雅釜

鉄打り雲山時雨なるめり　五涼

吹閑し雲の笠屋り紅日かな　圭系考

下戻りや墓のおもて帰し花　雲子

夜明けや雉踏そめし足の跡　百童

鞭追ふて渋谷かけ渓夫か哉　林楚岸

驚の羽をのばす岩根哉　（大間々）青牛

星遠く孤鳴く夜北寒さかな、　其六十

六十九人も渡舟や手より嵯　嵐黛

並も菊子露にも紅月の影うつる　為梁

日の限や賤かちら原朝千鳥　松葉

芦かれて岸ハ砂のく夕か凪　園李

童紀乃蘭衣に桜子日ゆかし　吟暁

耳洒り行也旅のしらせ哉　羽黄

鶴一羽寄驢に立し枯野かな　芳夕

松風に品有明れ月寒し　（大間々）鳥川

月満て千鳥鳴なり岸辺にし　（イセサキ）五山鎮

四季の鳥歌の事を

世世高や巣破らぬ鳥かな　崔　大間々　鈍化

反川や岩見ゆめ書き変かなる　〃

秋の雲絵あるよ行のうなる　〃

望鳥北風よ年ゆや寒北京　〃

同野辺

かけろふ乃中よ物ゆや牧の駒　梢鳥

午星や清水ゆうるれる　〃

石地蔵や馬の面吹初行　〃

傍者ゆ人星ゆ野辺ゆ小　〃

かぜ風て花の中ゆ柳ゆ　女　松尾

高や岸ゆ風ゆ紀貫の勝ゆ　耳谷

なを遠ゆ尾ゆ尾ゆ松　〃

岫ゆ初ゆ雲ゆ雉ゆ帰ゆ鶴ゆ　百丈

高川ゆ秋ゆ秋ゆ　〃

雪袁舊集卷之三

四季混雜　下野

雨ふる中書の雪や夾の雪　日光　萍玉

夕新月花中問ふうぐひす　枕

補陀洛の誓や庭の百日石　尺璞之

乳ふくむや幕の中の秋の蝶

夕新月花吸ふ蝶乃ゆくん　尺宝水

初雪や越来る雁は三日の月

梅咲や世に分ちかくち行　松路

行ふ尺魚日を河を山桜　麦風

風や夕紙ゆるれうへ　掬尼

牛を追ふ山路の芋麦の花　斧久

多結を河ふ行ゆて明かに

陰ふ伏ふしの芝を中稲　足尾　危江

墨日の澄乃数ふまむ槿　八

波行ふ障ふさ河ル雲の風　今市　珠明

出ふ芋や芋の高まふ石丸　馬山　素由

雲乃河ふ山を乎山の炎ひ鬼　駅井

四季混雜　　甲斐

雪の絶壁音まれ　茂田　可聲
山櫻斧を流れ澄み　黒沢　馬曉
ちらくと春の柳乃光り　三沢　冥戈
寺久の井よ訪て初音　　眠江
山吹や淺沼水ゆ色深し　市川　芦龍
石塔立て雑子鳴く浅山　　寄永
柳ちらけて鶯れ　　
かけろふや今を盛の磯巡　鳴崎　馬雪

山清を求て鶯乃来る　　淑月
竹の梢より沓ゆく

竹の梢ハ春の花盛り　八日町　二彌
村雨や曲ゆ流れ　市川　芦角
夕立や風の濃く土白し　茂田　路俠
ゆ立又鶯ゆ鳴かんこ　　馬雪
裏山ハ面の柳新をう　甲府　奥髮
伊呂くの花ちるの川　茅沢　京波
遠ゆて春ゆ出ハ拾ハ長てゆつき、　馬曉

山里や木樵のこゑも田植唄　閑古

鈴鹿や風雲ゆく秋の夕　峨江

鈴鹿や翌日八又の花の秋　鈴伝　孤山

嵐吹く路ゑ披次妻恋部　敏伝　由古

雲霧の路ゑ行くこの紅葉や九月尽

たらひ舟や雪ゆくおて雪の夕三　岩田　可都軍　漢甫

ゑ紅さてこの橋家屋多時雨　路侠

ゆくなる新宿遠し暮れ九月　漢甫

寒風之咽の鈴月に多比の羽　芦角

一日古仏ゑ見ゑ中ゑ紅川　彦波

春之部

武蔵

雲外雲鶯鶯雲ゑ南ゑ雲ゑ　八王子　書橋

橋ちゑ子寺ゑ八ゑ色て長閑ゑ、　隣ゑ

瀧清瀧の青ゑ青ゑ月に勝月、　桃斗

ゑ月ゑ月の谷静　ゑ月の音　蛭谷　風乙

ちゑ京ゑや谷ゑ谷ゑ杜ゑ鳴、　琴帝

花ゑゑ散ゑや野寺ゑ古簾（きたれ）、　何幸

夏草や蛤茶屋の書たるみ　雄谷　路一

山寺に猛り沼沼毒さうり　古川

面晴や かまつか原 去れ市　為水

乞食の糸文淋し　夕雲くる　獨何

今朝秋 山もさるかの日を求キ　小路　徒弦

ゆくゆくと 雷や 地と付春 九月　金久保　伯雨

面れ月晴て 楊の 散 所 ル　小来

芝芝よ 篠の 枝 責 ラ 二月 部　本庄沢　ラ川女

楊 乞て 驚 ル 九月の 楊 ル　雪の路

夏雨や小芝 芝 雲 霧し　羅佛

夏之部

おくれ 田 ル 色 キ 山 を ま く る ル　本庄　羅佛

沙汰や 帰 雲 川 よ ル し か 九 こ 雲　保谷　素山

蚊 雲 多 ル や 縣 乃 枝 れ 奥　羅門

面れ 雨 や 人 し 学 ん 歩 鶏 な く　八王子　蕉之

ル 人 や 百 里 の 桑 白 ま き ら　書橋

水 色 一 時 中 ま の 雨 乃 春　排斗

藻 の 玉 よ 流 流 せ 一 を 菜 行 売　延谷　兎由

[illegible]子涼八幸吹くかぜ　絲谷　風乙
[illegible]　望帝
[illegible]　一
[illegible]　何
[illegible]　沼芦
[illegible]　眉年

秋之部

[illegible]秋の中ゆゑ　涼谷　羅門

[illegible]秋の面、　本人
[illegible]　月女
[illegible]面の秋　李明
[illegible]老乃土仕事　桂踏
[illegible]本猛も敬ふ
[illegible]　秋扇　古友　苑泉
[illegible]　繁燒く　伯雨
秋面や竈[illegible]　沼芦
[illegible]　嫌ひ　帝谷　古友　顔麗
[illegible]　八王子　秋嶽

冬之部

清く息れ[illegible]雪の[illegible]代も
百[illegible]の[illegible]や河面の氷[illegible]　屑辛
風[illegible]し能勢の[illegible]川澄　額屋
[illegible]や[illegible]の櫻[illegible]　為水
風[illegible]や山八日の題　冬[illegible]　古川
風や年[illegible]　何幸
[illegible]　木人
[illegible]に山[illegible]月白　素山
荒[illegible]の水[illegible]　書橋

春之部　常陸

[illegible]　史薫
越[illegible]又一板[illegible]北[illegible]　一百戈
山[illegible]　大響
[illegible]夜[illegible]　文仲
[illegible]　秋水
[illegible]月[illegible]　玉立
[illegible]や雨[illegible]一日[illegible]　素石

梅咲や竹の織る八花蓙（もろ吉尺） 池鼓

星へおて新かな多り 橘 牡（水之上町） 文江

之味線八蔵と竹ちる 橘、（谷中） 萬玲

業の志やる章てある妹ひろ、 青扇

初年や麻よ来て南ゝ村鳥、 招林

眼鏡ゝ小八ゝ浮の笠ゝ 橘小（谷之内） 砂雨

志ゝ一琴よ来る客や夷の和（ホコタ） 素雅

散る笠の流乃 鶯如 鳴陸、 露之

茶よ敲て見てる 戦乱ゝ嘉ゝ、 烏仙

牡丹ゝ花をこゝ 胡蝶小（小川） 左右

ゝ蹄乃文字ゝ ゝとなる田螺小、 郭河

蝶ゝ毛羽を越ゝ ゝ初橋（多賀） 楚石

折舟のゝ ゝ沖よ鳴ゝ、 仙星

隻之部

中ゝ月を敲して行ゝ田楼小（水之谷中尺） 抑苔

拍子よ鈴虫 碧ゝ ゝ多（水之上町） 治線

持ゝ ゝのゝ ゝよ筬（つくも）陵や郭公、 西五

除しゝや蓮の葉よ書の罪よ書、 文艸

萍よ河畑[illegible]乃[illegible]　函出　誤雨

紫橋よ[illegible]　村松　雇汀

川下ハ[illegible]の水[illegible]　杜若　ホコタ　松下

[illegible]や藤袋　安孫　燕舎

萍や日よ[illegible]　潮末　糸條

[illegible]　天游

秋之部

萩一本[illegible]の[illegible]　楚石

幕や[illegible]ハ今[illegible]の[illegible]　仙星

[illegible]や[illegible]も[illegible]　左右

虹と[illegible]池[illegible]　吉左　静阿

雲[illegible]流て[illegible]の[illegible]　細蕉

秋[illegible]や[illegible]　鉾田　湖石

[illegible]て白[illegible]　、

八月の的[illegible]　丑川

一ツ家乃[illegible]　、

初汐や[illegible]　、

[illegible]浮て松の[illegible]　羽山

[illegible]臭よ[illegible]　、

[illegible]や[illegible]の海

塵塚乃底根ふも出る野辺かな　鉾田　素雅

松ふる霧むくる梢や海の月　延浮尺　子素

鶏鳴や藪乃うし海ハまさる吹　吉沼　石水

初雪くるくるる起る雲さき　水戸八谷中尺　柳若

富士の白〻闌て鶴ハ鳴　萬鈴

名月や嵐乃宿ハ鳴て　水戸上町　東川

名月や雨乃ハ雲ハ晴　金沙坊　代耕

若竹のつゆひとしめや星祭　ヌカタ　雀汀

蘭の香や月ふる星乃ハ雲　三日坊

茸狩乃山乃紅葉乃松乃白い　浮来

冬之部

雪に雨に雪ハ降ル　山峰

世雪乃降出し　同人　浮来

雪もてる頃の海乃氷の那　山年　伊之助

火と芋ふ焼も雪乃　女　玉之

木乃中小屋の雪乃ふる落葉　古扇

おゝ寒〻く木ハ戦ふ夜の雪　江戸　飛安

小窓ハ千葉ふ雪乃　法沢　鬼丸

多仙や鶉の音麻の面ゝ　　池蛟

傳ふ八橋は揚戸や春雨　水戸上町　求古

麻て起く撥*焚扁丸音ゝ　　麻石

麦蒔や畑乃中ゝ菜の煙　吉田　池流

天地ゝ動く氣波や初時雨　　松下

松葉焚し庭の深さや雪の雪　　鶴之

四季混雜　下繼

風やひさこの口も半ば八幡　甚里　玉谷

河あて筏おゝ流し行方知

桜の葉ゝ寒ゝ色ゝ夕時雨、　足　松菊

雪やゝ河を渡て紅葉ゝ　　みち女

ゝ鶴原乃鳥やはけて苔の音　谷市場　みち雪

起さるゝ見ル八重ゝ月雨　松山　廿　花花

月ゝ青職ゝ女や奥ゝ水、　　如橋

幕や寒ゝ浮世ゝ丈競、　　千之

露乃暗いゝ　　出羽

同　　陸奥

何ごとも涼み所やむめの花　白川　白萍
明りや影うつれて雉子の聲　本宮　吾石
其の香や霞れ飯焚ほそし、　青詠
梅か香く曉庵(あかつきいほ)の掃除かな　信夫　金英
峰をわたる雲も動(うこか)ぬ暑かな　二本松　柳阿
二三日去年をなや見こゝろ　白石　麦羅
鶯の大井原乃旭かな、　乙二
星八河ゆく只卯の花の白きかな　晴田宮　素蝶
焼きりて木を切るや初桜　舟岡　只　也薬

月笠や昨日も志られ翌日も又　入間田　尺　柳英
桃しきて雪八鳴りけり果古鳥　二本松　尺　一聲
去年まで柳の姿となりけり　佐沼　醉石
精つゝひの下闇広く軒氣かな、　魯萑
短夜や廣寺の鐘子山颪、　柳兆
気やしと小石踏みゆく夜の月、　乙人
幾きし鳥一羽なりける子　信夫　金英
扇ひろふ家も同じく暑かな　石巻　嘉山
見もてなす波子連なり三日の月、　呂竹

火の付如燈竹乃梅一田植歌　呂漁　桃祖
行く水に文字のよ出さくらか　女官　芳象
梅干す高湯の宮もとや蓮植蓋、　吉来
菅笠や側ら繕ふ書のひも　千田　桃谷
荒壁ら長き如日脚や秋の蝶　林女　青波
紙子賣高河原なる市女笠　呂城　梅梢
高々の芝高々と枯尺八哉　仙春　雪山
月丁や幸月も雲ちぎれ　岩金山　李英
蒸さくやくるり〳〵て本下閑、　湯沢　柳哲

脳点八海世に寄や如まつ金　大日山　寒志
ら拾ひ紙いとる蛍の沖ら、　泉浮　北之

春蔓之部

鄰家や窟（やど）の蔓ふ蔓縄自　江府　眺戸
飛蛍乃河ゆ橋の雲ゆ、　桂波
窟ゆ家族人ゆ勝月、　五出
花の浪よ加ら花ら郭公、　素篠
住荒〳〵庵も牡丹の盛ら、
蔓や乃乃紀藤も夜のさ風、　顧之

東都

[illegible]人[illegible]に支齋却　江府　為外
友も今宵は月を[illegible]六[illegible]却、　御風
沢潟や面白[illegible]田の[illegible]、　菓明

秋冬之部

白菊や墨[illegible]人の書[illegible]所、　義化
月も梟も[illegible]菊の[illegible]、　菓明
刈り[illegible]を[illegible]や四[illegible]の十三夜、　英九
白菊を一輪[illegible]なる[illegible]、　顧三
八朔や風も[illegible]　孔扇子、　桂波

山里八[illegible]も薪[illegible]落ち[illegible]、　廿　錦詩
[illegible]搗も世を捨て人の一生[illegible]、　山彭
白菊や月より清き[illegible]朗、　厂徹
名月や海[illegible]せ[illegible]　牛飲
稲妻や[illegible]さ[illegible]町[illegible]　樂[illegible]
町中や[illegible]門の[illegible]念佛、　義化
夕[illegible]や[illegible]る鳴く秋の風、　職戸
[illegible]月小[illegible]庭[illegible]、　京洛
[illegible]の[illegible]と手越[illegible]、　李邦

諸國

万葉乃白妙か金か銀か郡　高岳　牛飼

雲物景色の凄き壮川原　越前嶺　伯正

赤菊や舎人の妻乃捨つらん　近江　江淮

己れまさに名も桂ふや芙蓉　上総　汀竜

雲峰毛雲孔中なる泳ぎ　カ、　氷壺

千の谷よ月ちらるる月ぬ　伊予門番　知尺

山公事の沈み沈み、　尼溪

亜雲よ立し囲炉裏の焼埃　たゝらはこの　丈山

山吹よ又かゝる多々ら　ハ福　水巴

花多を挿ひし風乃柳ぬ　名古屋　支吟

砂川の清き流り蛙蛙小　神郡　蝶奴

山伝神ん舟多やゝ乗ら　カ、　麦多

○

手ぬ情。月ぬ多ゝ河逢　曉亀

ちら多やまされて乗ぬ人の歌　搏良

京中ぬ多を乗の頃ら雲小　一音

梅の風物多ら似ら花ぬ　宇大

鬼百合や夕月角八軒の宵　潭考
鶯羽うち吳服も初春野の錦　木仝
対面たつるかのごとくに　此地

○

蓑に吟消れうち御垣内　門瑟
風乃見えて篝の炎　秋瓜
蓑笠入や寒さと笑ふ角　卷阿
明るうしし人よ少しやの花　全化
蓑ゆ蓑内ゆ蓑内ゆ皆八名　宝井

腰ゝ書を障りうち出発れ法　汝上
燈乃日よ軒端うの新茶ゆ　楚茗
ゆゝ毎ゝ高き乃松ゝ皆せる　水鳥

○

さみれて濡るゝ伽藍れとも　鳥明
ゝてうにてうゝ氷室の日　大牛
世八春家橘ゝ乃葉の美新小　百路

○

梅ゝ香ゝ闇ゝ闇ゝ朧ゝ　果更

孝鶏の羽はうゝ作や秋の風　蝶雨

落ち花をしかる名残り哉　一角

えの水ぞてうゝ氷室哉　其化

○

亡師麦浪舎ゟ初ゝ拙一事を

不図おぼえ出して作りて

屋を陽炎野も牛や雄子哉　眠郎

言ふ相れ中ゝ月花　麦浪

然へ南ゝ秋の月蕎麦　如之

動ゝ冥ゝも窓の雨　為静

都さハ嘉ゝ遊ぶ牡牛　寸童

面ゝなるゝ風北茂郎　素菓

東略ス

追加

[illegible]　　越子宮　國南

[illegible]　　素井　[illegible]大

[illegible]　　武女坂　仙素

[illegible]

[illegible]　　武弘筆　月姫

[illegible]　　眞信先　布月

[illegible]　　かぶ　合浦

職人のむかし徳子何ぞ事を集行て
るゝ此ところ深くし給へ給ふ御乃筆
此に句々繪集め安冊収事一部
とかく作かめ趣の其筆を表かるゝ
見えと其花をめて川ろ文字の房さし
よい為みかくも集まるとに仰りぬ

上毛大間々
行年六十五歳　百丈

干時安永丁酉年信陽慈雄山下早
苗亭新庭の鶯を友として蕉風を築く
此集撰編者は菱苑職所居士之利
を謂ふ御経や祖翁九月八日、年忌
代の居らず、船のまに生涯を終
馬乃日のほとりに尤をむかふ者八月に
旅寝して旅を栖とせしに、八旬を
平常に親るこの為に菓は年を営む
而泊東漂しては洲南野逸団

農桑事半撥不供高年此實罪羅荒之
とも仁慈下の御恵利の如布告ありて
況哉や先帝より祖父義乃一軸御り光彩
いえらく世間此言葉を聚て湯
の如なり我伝へく職業あり生涯
祖墳を築と是以充て神とおもひ
給ふ事ふ布乃云御和ら璞玉色
ふ人まあいれを車集を照ふ
あるいは永く秘蔵ふ成奥とおもふ

ら秘ふと云月の銭手あり繁ら由
是を同士手告ふ日新郷ふて歌ふ
あ伝ふの二巻とあれる趣八巳峰ふら
帝河ふ伝ふ人なるこ予ふ云源派
てよ永く南里伝ふに云屋ふ文ふ
陸て辞ふ命記ふ御ふ高竜を
うの嗚呼幸ふ世ふ有ふに加ふ云
玉を振ふ光布の二ふ志の切ふる
を寸志報伝ふ而年ふ礼や恢意

僅一簣の功尺盈丈を積んで
終鄙山の碑よりひとしく
風塵五人何ぞ躊躇の懷ひとつさ
ら無き

信濃国城山下
藤湖小坡

安永六丁酉歳

東京

浅草田町
彫工 小林茂兵衛

日本橋横山町
書林 山口屋藤兵衛